

「執筆禁止時代のケストナー（Ⅵ）」

佐藤和夫

1. はじめに

ケストナーはかねてから彼の詩集《Lärm im Spiegel》の中で詩に生命力をもたせ、一般の人に近づける「実用詩」を主張していた。彼の言う生命力のある詩とは

- 1) 読む者が眠り込まないこと
- 2) 精神的に利用しうること
- 3) 現在の喜びや苦痛と交わっていること
- 4) 現在と交渉する人のために書かれていること

の4条件を満たしていることが必要で、このような詩をケストナーは「実用詩」と名づけた¹。

とはいえ、1933年以前に出た彼の四つの詩集は実用詩という観点からは「実用的」とは言いがたいかもしれない。それぞれの詩の配置の仕方といい、オーザーの挿し絵といい、従来の枠組みを破ったものではあっても、即「実用的」ではなくむしろ詩人ケストナーの力量の程を文学界、あるいは批評家たちに問う側面の方が強いという印象はまぬがれがたい。ケストナーの主張を実践するためには詩集の新たな編成が必要であったのだが、思いがけなくも従来のままでは出版できなくなった執筆禁止時代にそれが《Doktor Erich Kästners Lyrische Hausapotheke》（1936、以下この詩集を《LH》と略記する）²で実現されることになったのである。ただこの詩集が先行の4詩集と異なるのはそのタイトルが示しているように「平均的な内面生活の治療に捧げられたハンドブック」³としての効果を前面に押し出していることだ。つまり、執筆禁止措置を受けた詩人としては当然ながら、より刺激的効果をもつ「圧倒的に社会的、政治的、社会批判的性格を帯びた詩」⁴は省かれている。

《LH》は「すでに発表済みの詩及び未発表の詩の中から選択」⁵して編集さ

れた。ウインケルマンは「詩集《LH》には…117の詩が収められており…そのうちおよそ三分の一が新しいもので、残りは先行する詩集を再掲載したものである」⁶と言っているが、正確には本論文末の別表に見るように119の詩があり、そのうち37、三分の一弱が新しいものということになる。ただし新しいものとは先行の4詩集⁷に未収載ということであって、必ずしも未発表ということではない。例えば《LH》の2番目に出てくる《Hotelsolo für eine Männerstimme》は雑誌、〈Die Weltbühne〉の1932年45号に掲載されている。

本論においては以上のような成立経緯を踏まえて、特に先行詩集に未収載の詩を中心として取り上げ、さらに加えて《LH》の特色である「薬剤処方」との関連にも言及してみたい⁸。

2. 巻頭詩

序文で述べられている表向きの意図がどうであれ、ケストナーが言おうとしているところは《LH》が詩集であるが故に詩そのものから汲み取る必要がある。そうであるなら、とりわけ巻頭詩の持つ意味は大きい⁹。国内で禁止された作家であるからむきだしの主張はできないけれども、比喩を用いてなら間接的なメッセージは伝えることができる。《LH》の巻頭詩はまさにその比喩を用いた詩《Das Eisenbahngleichnis》(1)「鉄道の比喩」なのである。

Wir sitzen alle im gleichen Zug
und reisen quer durch die Zeit.
Wir sehen hinaus. Wir sahen genug.
Wir fahren alle im gleichen Zug.
Und keiner weiß, wie weit.
「みんな同じ列車に乗って
時代横断旅行をしている
みんなのぞきこむ 十分見たのに
みんな同じ列車で行く
なのにくら乗るのかはわからない」

第2節のように、挙動は様々であっても、誰もが好むと好まざるとにかかわらず、同じ列車に、長短の差はわからないけれども乗り合わせねばならない。

Ein Nachbar schläft. Ein anderer klagt.
Der Dritte redet viel.

...

「隣は眠ってる もう一人はぐちってる
三人目は饒舌だ
...」

この時代という列車から降りることが許されるのは死んだ者だけだ。

...

Die Toten steigen aus.
「...
死者たちは降りる」

それにもかかわらず、この列車は行先も、目標も、走っている理由もわからないミステリー列車なのである。

...

Der Zug, der durch die Jahre jagt,
kommt niemals an sein Ziel.

...

Der Zug fährt weiter, er jagt durch die Zeit.
Und niemand weiß, warum.

「...

歳月で追い立てる列車は
決して目的地には着かない

...

列車はさらに進み、歳月で追い立てる
しかも理由を知る者はいない」

ただはっきりしているのは詩の最末尾に示されているように、多くの人々が乗るべきでない列車に乗ってしまっていることである。

...
 Wir sitzen alle im gleichen Zug.
 Und viele im falschen Coupé.
 「…

みんな同じ列車に乗っている。
 しかも多くの人は間違った車室に」

おかしいと思ってももはや乗り換えはきかない。降りられるのは先にも見たように死んだ人だけなのだ。

作者がこの詩に託したメッセージは作者自身の指示する「使用法」(Gebrauchsanweisung)¹⁰からもわかる。この詩は

「生きることを総括するとき」(wenn man das Dasein überschaut)
 と

「問題が感じられたとき」(wenn sich Probleme melden)
 に用いよと指示されている。つまり両者を組み合わせて考えれば、「生きること」と「生きることに伴う諸問題」ということになる。すなわち、これはケストナーが序文で述べていることと合致しており、巻頭に置くにふさわしい詩と言えよう。

3. 《Kurz und Bündig》収載の詩

後に編集された詩集《Kurz und Bündig》(1950, 以下《KuB》と略記する)に収載されることになる詩は《LH》に全部で11編あり、二詩節からなる一つを除いてはすべて一詩節で構成され、「簡潔で的確」を旨としている。

これらの詩は先の「実用詩」論に見られるように従来の詩に対するアンチテーゼなのであり、このことを最も明快に語っているのが《Kalenderspruch》(83)である。

Vergiß in keinem Falle,
 auch dann nicht, wenn Vieles mißlingt:
 Die Gescheiten werden nicht alle!
 (So unwahrscheinlich das klingt.)
 「決して忘れてはいけない

うまく行かないことが多くとも、忘れるな
 誰も聡明とは限らないことを
 (非常に嘘っぽい響きはあるが)」

この詩の最初の3行が例えば日めくりのカレンダーの裏などに書かれている言葉であろう。括弧の中が作者の率直な感想だ。そしてこれは読者の思いにも通じる。この詩の処方「自信が揺らいだとき」だから括弧の中よりもむしろ最初の3行をストレートに信じる必要がある。しかし正直に言えば、素直には信じられない。それにもかかわらず、現在自信を喪失している者はわずか1パーセントでも真実性があれば、「非常に嘘っぽい響き」があっても、それにすがりたいのである。ドクター・ケストナーの提供する処方はカレンダーの文句の断定調のように全面的信服を期待するのではなく、現代人の心にわずかに残っている真実に回復の手がかりを見出しているのである。

さらにこのドクターは「カレンダーの箴言」のように人間を等身大で比較するのではなく、《Aufforderung zur Bescheidenheit》(64)のように卑小にして観察することを薦める。

Wie nun mal die Dinge liegen,
 und auch wenn es uns mißfällt:
 Menschen sind wie Eintagsfliegen
 an der Fenstern dieser Welt.

Unterschiede sind fast keine,
 Und was wär auch schon dabei!
 Nur: die Fliege hat sechs Beine,
 und der Mensch hat höchstens zwei.

「とにかく実際そうなんだから
 たとえ気に入らなくたって
 人間はこの世界の窓にとまる
 カゲロウみたいなものさ

なんだってそう違いはないんだ

どうってことないじゃないか
 だがカゲロウには足が6本あるが
 人間には2本しかない」

人間は足の数でさえ、カゲロウには及ばないのだ。

一連の箴言詩のねらいは以下のようにその処方を読めると明らかになる。

《Mut zur Trauer》(3) → 「生きるのが嫌になったとき」

《Der Streber》(7) → 「同時代人に腹を立てたとき」

《Das ist das Verhängnis》(11) → 「問題が感じられたとき」

要するに、日常に生きるのに精一杯で、周囲の人には腹の立つことが多く、その結果多々問題が生じるのである。しかしこれも人間を等身大で見るから苦悩が募るのであるから、思い切って見方を変えれば、いくら謹厳に努力したところで人間は「文化の森の猿」(《Der Streber》)にすぎないのであり、「悲しいときは悲しめばいい／…／命にかかわりはしない」(《Mut zur Trauer》)のである。より大胆に悟ってしまえば《Das ist das Verhängnis》のようになる。

Das ist das Verhängnis:
 zwischen Empfängnis
 und Leichenbegängnis
 nichts als Bedrängnis.

「これが宿命だ
 受胎と
 埋葬の間には
 困窮あるのみ」

しかしこう言い切ってしまうあまりにも突き放された印象を受ける。《Und wo gibt es das Positive, Herr Kästner?》「それではどこにいい点があるのですか、ケストナー先生」¹¹と聞いてみたくもなるのも道理である。それに対してケストナーは《Moral》(14)でこのような答えを用意している。

Es gibt nichts Gutes.
 außer: man tut es.

「善など存在しない
実行するのであれば」

この詩は《LH》の詩の中で最も短く、わずか二行しかない。けれどもケストナーの詩を知った上での問いに対する答えであるから、最も含蓄に富んでおり、《KuB》収載詩グループの中で最も多い効能が指定されている。すなわち、
「教育が必要であるとき」
「進歩を問題とするとき」
「問題が感じられたとき」
の三つである。けれども、どんな処方示されていようと「実行するのであれば」何の効能もあらわれない。詩という薬を生かすも殺すも読む人しだい、ケストナーはこう言いたいかのようなのである。

4. <Nachlese>の詩

《LH》の詩のうち先行4詩集収載詩及び《KuB》グループ以外の詩は後の全集版では<Nachlese>「補遺」として一括して収められている¹²。<Nachlese>グループに属する詩は全部で26編ある。これらの詩は前章で取り上げた非常に短い詩形をもつ《KuB》グループの詩とは異なり、外形上は先行4詩集グループの詩と区別はつかない。しかしながら、<Nachlese>グループに割り当てられた処方を見ると、そこからはある傾向が読みとれる。処方で特に目立つものは

「貧困に直面したとき」

と

「あまりお金がないとき」

で、前者は7編中4編、後者は7編中5編を占める。このグループでこれに次ぐ処方数を獲得しているのは8編中3編の

「老齢で悲しくなったとき」

と5編中3編の

「天気が悪いとき」

しかない。他はすべて二つ以下の処方を数えるにとどまる。「天気」が処方された三つの詩は《Frühling auf Vorschuß》(65)での

…

Man kann's ganz gut verstehen, nur:
sie werden sich erkälten!

「…

それはよく理解できる, ただし
風邪を引いてしまうよ」

におけるように

単なる感傷に浸らせない異化効果を伴ってはいるけれども基本的には自然を歌った典型的な叙情詩といえる。これを別にすれば他の三つの処方に絡む詩には作者の社会批判の視点がみえるので以下ではこの点に絞ることにしたい。

お金がなければそれはただちに貧困に結びつくが, <Nachlese>グループでこれら二つに効能が示されているのは《Der Streichholzjunge》(39)だけである。この詩ではケストナーの子供向けの物語《Pünktchen und Anton》のアントンを思わせる少年が,

Streichhölzer! Kaufen Sie Streichhölzer!

Drei Schachteln zwanzig!

「マッチ, マッチはいかがですか

三箱20ペニヒです」

をキャッチフレーズにして道端でマッチを売っている。彼の家庭は父親が失業中で, そのためにアルコールにおぼれており, けなげな少年は少しでも家計を助けようとしているのだが, アンデルセンのマッチ売りの少女同様買ってくれる人はいない。けれども20世紀の詩人はけっして最後を美しく仕上げているわけではなく, より踏み込んだ社会的視点を提供している。

Mit braunen und schwarzen Schnürsenkeln
verdient man natürlich mehr.

Doch da brauchte ich erst mal drei Mark

Und wo nehm ich die hier?

「茶色や黒の靴ひもなら

もちろんもっともうかる
 けれどそれには3マルクもいるんだ
 どこからそんなお金が入るの」

「貧困」にもしっかりと資本の論理が作用し、同じ大道の立ち売りでも資本の違いが利潤の違いとなつてはねかえるのである。

これと全く対照的に描かれているのが《Modernes Märchen》(117)の貧しい夫婦で、彼らには貧しさを豊かさに変える空想力とユーモアがあった。

Und aßen Brot, als wär's Konfekt,
 und spielten: Wie Gänsebraten schmeckt.
 Dergleichen stärkt wohl die Phantasie.
 Drum wurde der Mann, blitzblatz! ein Genie.

「パンをお菓子のように食べ
 鶯鳥のローストの味がするふりをした
 こんなことが空想力を強めたのだろう
 だからその男はたちまち天才になった」

彼はこの才能を生かして小説を書き、それが当たって大金持ちとなるが、大金を手にしたことがかえってあだとなってしだいに明るさを失っていく。そこで夫婦は彼らの富を孤児にゆずり、昔の活力を取り戻すのである。本当にこのように生きることができたらとてもすばらしいのだが、残念なことにこれはタイトルにも示されているように、メルヘンであり、しかも最終詩節ではメルヘンの決まり文句でそのことがもう一度確認される。

...
 Und wenn sie nicht gestorben sind ...
 「...
 そして彼らが死んでいなかったら...」

したがってより現実的な対処法としては《Keiner blickt dir hinter das Gesicht》が参考になるだろう。この詩には2種類あって、「大胆な人用」

(Fassung für Beherzte) (5)と「小心な人用」(Fassung für Kleinmütige) (6)がある。

大胆な人は「貧困」を直視しないで、自分の目にそれが触れないようにすべて背中に乗せてしまう。その結果、歩行もできないくらいに重荷となる。けれどもどうせ自分の貧乏の程度など他人にはわかりはしないのだし、自分も直接目で見てはいないのだから、正確なところはわからない。この歩行も困難なほどの貧乏を正視しないで、居直る人はまさに「大胆」だ。しかし誰にでもできることではない。だが親切な詩人は小心者用のテキストを用意している。ケストナーはこの詩で(どんな貧しい人であろうとももっている)富について語っている。それはもちろん、「...目に見え、税金を払う富...」などではない。誰でももつことができる富(作者は“Schatz”=「宝」という言葉を用いている)とは「忍耐」(Geduld),「ユーモア」(Humor),「善意」(Güte)といったものである。

...

Denn im Herzen ist viel Platz.
Und es ist wie eine Wundertüte.

Arm ist nur, wer ganz vergißt,
welchen Reichtum das Gefühl verspricht.

...

「...

なぜなら心にはたくさんの余地がある
不思議な袋みたいなものだ

この気持ちが約束する富を
すっかり忘れたものだけが貧しいのだ」

ただし、作者も最後に語っているように、「君自身ときどきそれを知らないでいる」のである。

「貧困」に対してはもっと元気の出る、心暖まる詩が用意されている。その詩《Hinweis auf die Hände einer Waschfrau》(22)では手を指示する語が

名詞として4回、代名詞として11回、関係代名詞として2回登場し、一貫して洗濯女の手注目している。その手は「家庭用に」、「洗濯用に」用いられるのであり、したがってこの手は「マニキュアややすり」とは無縁であり、「ラヴェンダー水の香りが漂うことはない。」最終節はこう強調している。

...

Die Hände, die Sie hier sehen,
sind nur für den Hausgebrauch.

「...

あなたがここで見ている手は
ただひたすら家庭用なのだ」

確かにこの手は処方の示すように「貧困」を象徴している。けれどもさみしげでもなければ、弱々しくもない。

...

Sie wringen und rumpeln und schufteten
und fürchten sich nicht davor.

「...

手は絞って、揉んで、せわしく動く
そしてそれをおそれはない」

力強く貧困と闘っているのである。

次に「老齢で悲しくなったとき」に目を転じてみよう。E. T. A. ホフマンのハンディキャップを背負いながらも、常人の知らない楽しみをもつ人物を描いた《Des Vettters Eckfenster》をモチーフとしたそれと同名の詩(31)はかなり趣を異にしているが、《Alte Frau auf dem Friedhof》(8)は墓地で祈りを捧げるほかに何をするでもない老婆の孤独な姿を強烈に描いており、彼女の最終行の祈り、

...

... 《Tod, nun komm!》

「…

…『死よ、さあ来ておくれ』

はきわめて痛切だ。また《Das Altersheim》(34)では老人ホームがこう位置づけられている。

…

Das ist die letzte Station vor der letzten.

Dazwischen liegt keine.

「…

これは最終駅の一つ手前の駅です

その間に駅はありません」

このように老人ホームを最終「滞在地」(Station)とする位置づけは悲しすぎるが、厳然たる事実なのである。

以上の「貧困」、「金」、「老齡」の処方に配された詩から共通して汲み取ることができるのは先にも記したように社会批判の視点である。そしてこれは詩人として出発したケストナーの文学活動の主要な特色の一つであった。だが1933年以前とは異なってストレートな社会批判は不可能であり、批判を深めることも広げることも自制しなければならなかった。貧困の解決は洗濯女の詩に見られるように個人的努力に限定され、資本社会の仕組みへの言及は《Der Streichholzjunge》でのようにせいぜい3マルクに制限せざるをえなかったのである。

5. 「多効能型」の詩

《LH》には36種類の処方が用意されており、それらが119の詩のそれぞれに最小のもので一つ、最大のもので四つ与えられている。平均では約1.7で、その分布を見ると次のようになる。

処方が一つ付与されている詩 — 51

処方が二つ付与されている詩 — 55

処方が三つ付与されている詩 — 12

処方が四つ付与されている詩 — 1

計 119

一つの詩に対する処方の付与が一つないし、二つに限られているのが大部分であるという結果からみると詩の効能はかなり特定化され、専門化されていると言える。三つ以上のものは13で、全体の約11%である。以下においてはこれら13の詩を「多効能型」の詩としてその特色をさぐってみることとする。

社会的傾向の強かった<Nachlese>グループの詩に対して、多効能型の詩にはより個人的事情が強く反映され、そこに天候や気象、異郷滞在など孤独感を強める作用をする要素が投影されているようにみえる。とりわけその傾向が著しいのは

都会 - 孤独 - 自然への憧憬 - 都会への回帰

のいずれかのモチーフをもつものである。その代表が《Meyer IX. im Schnee》(51)と言える。タイトルはおそらく破門を法王に解いてもらうために雪の山中に立った古の^{いにしえ}ハインリヒ四世をもじっているのだろう。だがここに登場する人物はそのような大物ではない。ただ気概だけは王侯にも負けなつもりで人気のない雪の中へ、風景と孤独を楽しみに出かけてきたのである。

Der Schnee hängt wie kandiertes Obst im Wald.

Es war ganz gut, daß ich gleich gestern fuhr.

...

「雪が砂糖をまぶした果物のように森にかかっている
ちゅうちょしないで昨日出てきたのは本当によかった
...」

雪の中にいれば都会の生活などまるで嘘のようであり、あくせく生活することなど馬鹿らしいと思う。

Wenn man so ganz allein im Walde steht,

begreift man nur sehr schwer,

wozu man im Büros und Kinos geht.

Und plötzlich will man alles das nicht mehr!

「こうして森の中に一人っきりでいると

どうしてオフィスや映画館へ行くのか

なかなかわかるものではない

そして突然なにもかも嫌になる」

だがその前の詩節では「冷たい水も靴の中に入ってる」と述べられており、そう粋がってばかりいられないこと、単純に感傷に浸ってばかりもいられないことがすでに暗示されている。そして最後には、この雪の中にとどまる限り、都会の喧噪への郷愁にかられることを自覚せざるをえなくなる。

...

Es ist furchtbar still. Mir fehlt der Krach.
Die ersten Nächte lieg ich sicher wach
und möchte nach Berlin.

「...

恐ろしく静かだ やかましさが足りない
さしあたり夜はきつと目がさえて
ベルリンへもどりたくなるだろう」

都会の孤独もつらいが、大自然の中のそれも感傷に浸ることばかりを許しはしないのである。

この系列に連なるのが、全く孤独なものにもかかわらず、知人にでも会ったかのように帽子を取って挨拶をし、小さな抵抗をしてみせる《Sozusagen in der Fremde》(17)であり、感傷旅行に出たのはよいけれど孤独に悩まされたあげく、話を交わせる知人ではなく気管支カタルに見舞われた人をテーマとした《Sentimentale Reise》(27)である。

結局都会人は町の中では孤独、田舎に出ればもっと孤独で、つまるところ再び都会へ帰らざるをえない。それならいっそのこと田舎に都会をそっくり持ち込んでしまえばよいという結論も引き出すことが可能になる。

その姿が《Vornehme Leute, 1200 Meter hoch》(72)に描かれている。ここでホテルに投宿している人々は自然を求めに来ているにもかかわらず、自然と接触しようとはしない。

...

Sie sitzen in den Grandhotels

und trinken immer Tee.

...

Sie haben ihren Smoking an
und lauern auf die Post.

...

Sie tanzen Blues im Blauen Saal
und haben keine Zeit.

...

Sie schwärmen sehr für die Natur
und kennen die Umgebung nur
von Ansichtskarten her.

「...

あの人たちはグランドホテルの中において
いつもお茶を飲んでいる

...

あの人たちはタキシードを着て
便りを待っている

...

あの人たちは青の間でブルースを踊っていて
忙せわしない

...

あの人たちは自然を熱愛しているのに
そのまわりのことはただ
絵はがきから知っているだけ」

結局彼らは自然の中に小さな都会空間を作って安住し、自然を理解しないまま、

また本物の都会へ戻ってしまう。

Sie sitzen in den Grandhotels
und sprechen viel von Sport.
Doch einmal treten sie, im Pelz,
sogar vors Tor der Grandhotels –
und fahren wieder fort!

「あの人たちはグランドホテルの中において
大いにスポーツについて語っている
ところが外に出るときには
グランドホテルの門の前に出るのでさえ毛皮をはおり
また車でお出かけになる」

金さえあればこのような都合の良い自然の取り込みも可能だ。だが本来は自然そのものを求めて高地へやってきたのだから、これでは本末転倒である。

以上のことをまとめるとこう言えるだろう。孤独を取り上げれば、その代表的場所は都会であり、そこに住む人々は自ずと現在地と異なる場所、あるいは自然にあこがれるから、このタイプの詩はいきおい多効能となる。

これらのグループの中でも最も多効能なのが《Nasser November》(66)である。この詩には唯一四つの処方が付与されているが、それにはそれだけの理由がある。この詩は他の詩とは対照的に、場所が自然ではなく都会になっている。しかし都会にも叙情があり、趣があり、それを愛でることが可能であることをこの詩は教えている。

Ziehen Sie die ältesten Schuhe an,
die in Ihrem Schrank vergessen stehn !

...

Abends tropfen hunderttausend Lichter
zischend auf den glitschigen Asphalt.
Und die Pfützen haben fast Gesichter.
Und die Regenschirme sind ein Wald.

Ist es nicht, als stiegen Sie durch Träume?
Und Sie gehn doch nur durch eine Stadt!

...

「戸棚にしまい忘れている
一番古い靴をはきなさい

...

夕べには何百何千の光がしゃらしゃらと音を立てて
きらきら光るアスファルトにしたたり落ちてくる
水たまりには顔があるみたいだ
傘の群れは森だ

まるで夢の中へ入ったみたいじゃないか
いやただ町の中を歩いているだけなのだ
...」

他の詩と比べてこれはより積極的で生き生きとしている。このことは上記以外にも指示・命令を意味する文が三つも出ていることからもうかがわれる。

...

Aber trotzdem : gehn Sie nur spazieren!

...

Geben Sie ja auf die Autos acht.
Gehn Sie, bitte, falls Sie friert, nach Haus!

...

Und, ziehn Sie sofort die Schuhe aus!

「...
でもそれでも、散歩に行きなさい

...

車には気をつけて
 凍えたら家へ帰りなさい
 …
 そしてただちに靴を脱ぎなさい」

この詩全体に見られる積極性、生彩はやはりケストナー本来の持ち味と関係がある。児童文学においても都会を舞台としたときは独創的であったものが自然と関連づけようとするに従来の枠を抜け出られないのと同じことが詩についても言えると思われる¹³。やはりケストナーは本来都会っ子であり、そこを舞台としたとき最も本領が発揮されるのである。

上記の詩とはいくぶん異なる趣を有すると判断される残りの六つの詩についても簡単に触れておきたい。そのうちの一つ《Moral》(14)は《KuB》のグループに入っており、さらに《Albumvers》(60)も形式上それらと同様一詩節からなる短詩であり、その内容も警句風である。

…
 Das Huhn ist auf Eier eingerichtet.
 (So wurde schon manche Idee vernichtet.)
 「…
 鶏は卵を生むようにできているのだ
 (こうして無に帰したアイデアが多々あった)」

他の四つの詩の特色はタイトルから明らかになる。

《Ein Mann gibt Auskunft》(67)
 《Höhere Töchter im Gespräch》(80)
 《Selbstmörder halten Asternbuketts》(102)
 《Eine Frau spricht im Schlaf》(104)

いずれも主語ないしそれに準ずる語が不定冠詞付き、あるいは無冠詞複数となっており、詩に含まれる内容の不特定性、一般性を示している。そのことを《Ein Mann gibt Auskunft》でみてみよう。

この詩で「ある男」は女の子に愛されながらも自らはそうはなれずに、別れの言葉を述べている。

Ich riet dir manchmal, dich von mir zu trennen,
und danke dir, daß du bis heute bliebst.
Du kanntest mich und lerntest mich nicht kennen.

...

「何度も別れることをすすめたのに
今日までいてくれてありがとう
君はぼくを知ってはいたけどわかってはいなかった
...」

男は女の子に距離を保っていた。

...

Ich stand nur fern von dir. Ich stand nicht oben.
「...

ぼくは君から離れていただけだ 見おろしていたわけじゃない」

男は自分の感情の乏しさ、消極性をはっきり表明する。

Es gibt auch andere, die wie ich empfinden.
Wir sind um soviel ärmer, als Ihr seid.
Wir suchen nicht. Wir lassen uns bloß finden.

...

「ぼくと同じように感じるやつだっている
ぼくらは君たちよりずっと貧しい
ぼくらは探さない 見つけてもらうんだ
...」

男は昔はよかったとはいうものの女に別れを告げる。けれども次の展望はなく、不安に満ちている。

...

Das Jahr war schön und wird nicht wiederkehren.

Und wer kommt nun? Leb wohl! Ich habe Angst.

「…

あの年はよかったが、二度とないだろう
 今度は誰が来るのか ごきげんよう ぼくは不安だ」

男の虚無的な心情が際立っている。この男の思いは詩の生まれた時期の、第一次世界大戦とその後の未曾有の混乱を経た青年のそれと考えれば、よく理解できる¹⁴。そのような青年の一般的心情を現しているが故に、この詩では季節感も場所も特定されていないのだと思われる。孤独という点に関してはこの詩は「多効能」グループと共通しているが、接触、接近を積極的に求める気持ちが欠けている。

他の三つの詩にも場所や時間の具体性が欠けており、それ故にそこで語られていることが一般性、抽象性を獲得する可能性が高くなる。したがって必然的に「多効能」となると解することができる。

6. おわりに

ケストナーの詩の特色の一部をなすのが風刺や社会批判である。それが《LH》で最もよくあらわれる可能性があるのは「同時代人」への対処法を扱った詩であろう。しかしここにも前章で述べた特徴が強く出ている。やはりたとえ社会批判をしようにも抽象性、一般性の枠の中で語らねばならなかったからである。

その典型的例は作者の指定する「処方」の範囲からははずれるけれども、巻末の詩《Ein Kubikkilometer genügt》(119)である。数学者の計算によれば一立方キロメートルの入れ物があれば、全人類（当時の想定で20億人）を詰め込むことができ、そうしてその箱を南北アメリカ大陸の南北に連なる大山脈群（コルディリエラ山系）のどこかに捨てることが可能だとその詩は語る。

…

Da lägen wir dann, fast unbemerkbar,
 als würfelförmiges Paket.
 Und Gras könnte über die Menschheit wachsen.
 Und Sand würde daraufgeweht.

Kreischend zögen die Geier Kreise.
 Die riesigen Städte stünden leer.
 Die Menschheit läge in den Kordilleren.
 Das wüßte dann aber keiner mehr.

「…

そうすれば、私たちはほとんど気づかれないままに
 サイコロ状の包みとなる
 人類の上に草が生え
 砂がそのうえに吹きすさぶ

ハゲタカが鳴きながら輪を描き
 巨大都市は空になる
 人類がコルディリエーラ山系の中にいる
 こんなありさまでは誰も知る由もないが」

作者の処方枠内にある《Ein Kind, etwas frühreif》(43)では批判はモラルのレベルにとどまり、《Maskenball im Hochgebirge》(58)では非現実の状況が設定されている。《An ein Scheusal im Abendkleid》(18)や《Sogenannte Klassefrauen》(38)に至っては現在の目から見ると女性差別と取られても不思議ではない詩句が含まれている。何しろ処方は「同時代人に腹が立ったとき」というのであるから、腹立ちが加速して八つ当たり気味のところもある。

確かにケストナーは《LH》序文で「既発表及び未発表の詩の中から抜粋して携帯に便利な大きさで出そうという計画はこの本よりもずっと古い」¹⁵と語ってはいるが、実際には先の四つの詩集から政治批判、社会・経済批判を除いたものであり、作者にとっては本意なものであったことを忘れてはならないであろう。

とはいえ「実用詩」(Gebrauchslyrik)にはそれ自体にすでに従来の詩に対する反逆の意図が含まれているのである。例えば「実用テキスト」(Gebrauchstext)といえは、「何らかの用途および実用機能を有する非文学的テキストの総体的概念」¹⁶であり、元来は文学のテリトリーの外にある概念であった。一方、文学の立場からみて「実用文学」(Gebrauchsliteratur)とは「特定の実用目的

をめざして作られる文学の包括的概念。実用文学にはしたがってとりわけ祈祷書、公告テキスト、聖歌、流行歌の歌詞、びらやチラシ、記念帳の詩句が含まれる。〔誕生、命名、結婚、死亡といった〕特定の機会に作られる詩や政治的参加を意図する文学の全領域、情宣演劇や情宣詩に至るまで実用文学に組み入れられる]」¹⁷ ものなのである。

執筆禁止のこの時期にあえて「実用詩」を公にした詩人は消極的方法とはいえ、すでに当局による身柄拘束の経験もあり、慎重な振る舞いが肝要だったのだから、読者にその責務を少なくともその一部は果たしたと言えるであろう。やり残した部分はナチ政権崩壊後に持ち越されることになるのだが、《LH》の「積み残し」を第二次世界大戦後の新たな詩集

《Bei Durchsicht meiner Bücher》(1946)

で清算したときには細かな使用法は付いていなかった。

注

- 1 Kästner, Erich: Gesammelte Schriften. 7 Bde. (1959) Bd.1 S.125
(以下この全集によるときは巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示す)
- 2 本論文では1977年刊の Droemer Knauer 社版を用いた。
- 3 《LH》, S.5
- 4 Kästner, Erich : Bei Durchsicht meiner Bücher. 1946 S.6
- 5 《LH》, S.5
- 6 Winkelman, John : Social Criticism in the Early Works of Erich Kästner. S.26
- 7 《Herz auf Taille》 (1928)
《Lärm im Spiegel》 (1929)
《Ein Mann gibt Auskunft》 (1930)
《Gesang zwischen den Stühlen》 (1932)
- 8 なお、以下で《LH》から引用する詩には括弧の中に掲載順番号を付して表示する。全集における頁数は別表を参照されたい。
- 9 第1詩集《Herz auf Taille》の同じく巻頭詩末尾でケストナーは

...

Dann zeigen wir euch, was wir lernten!

「…

じゃあ、ぼくらが学んだものをお目にかけてよう」(I-38)

と記したことが思い起こされる。

10 《LH》, S.9ff.

11 I-214

12 I-281 ff.

13 vgl. 佐藤和夫, 「執筆禁止時代のケストナー (IV)」茨城大学人文学部紀要 (人文
学科論集) 第25号(1992)

14 この詩は先行詩集の一つ《Ein Mann gibt Auskunft》のタイトルを担っている
詩である。

15 《LH》, S.5

16 dtv-Brockhaus Lexikon. Bd.6 S.225

17 Schülerduden 《Die Literatur》 S.162

付記：詩の解釈にあたっては小松太郎、高橋健二、飯吉光夫各氏の訳を参照させて
いただいた。記して感謝申し上げます。

別表 《LH》掲載詩頁順索引

「掲載」欄は《LH》掲載詩を収載している詩集名を示す。

HaT: 《Herz auf Taille》 LiS: 《Lärm im Spiegel》

MgA: 《Ein Mann gibt Auskunft》 GzS: 《Gesang zwischen den Stühlen》
KuB: 《Kurz und Bündig》 N: 《Nachlese》

「頁」欄左は7巻本全集: Erich Kästner Gesammelte Schriften 7 Bde.
Bd. 1

右は8巻本全集: Erich Kästner Gesammelte Schriften für
Erwachsene 8 Bde. Bd. 1

での掲載頁を示す

番号	詩の題名	掲載	頁	頁
1	Das Eisenbahngleichnis	GzS	259	257
2	Hotelsolo für eine Männerstimme	N	285	281
3	Mut zur Trauer	KuB	343	340
4	Zur Fotografie eines Konfirmanden	N	287	283
5	Keiner blickt dir hinter das Gesicht (Fassung für Beherzte)	N	286	282
6	Keiner blickt dir hinter das Gesicht (Fassung für Kleinmütige)	N	286	283
7	Der Streber	KuB	337	335
8	Alte Frau auf dem Friedhof	N	288	284
9	Repetition des Gefühls	LiS	130	139
10	Bilanz per Zufall	GzS	267	264
11	Das ist das Verhängnis	KuB	325	322
12	Begrenzung mit einem Trockenplatz	GzS	245	244
13	Traum vom Gesichtertausch	GzS	251	249
14	Moral	KuB	327	324
15	Der Weihnachtsabend des Kellners	N	293	289

番号	詩の題名	掲載	頁	頁
16	Entwicklung der Menschheit	GzS	223	223
17	Sozusagen in der Fremde	GzS	229	228
18	An ein Scheusal im Abendkleid	GzS	230	229
19	Warnung vor Selbstmord	LiS	120	130
20	Sport	KuB	338	335
21	Er weiß nicht, ob er sie liebt	MgA	178	183
22	Hinweis auf die Hände einer Waschfrau	N	293	290
23	Die Wälder schweigen	N	308	305
24	Tagebuch eines Herzkranken	N	310	307
25	Stehgeigers Leiden	N	295	292
26	Hamlets Geist	N	312	309
27	Sentimentale Reise	HaT	63	76
28	Ganz besonders feine Damen	LiS	103	114
29	Umzug der Klubsessel	LiS	112	122
30	Warnung	KuB	329	326
31	Des Veters Eckfenster (E.T.A. Hoffmann gewidmet)	N	283	279
32	Der gefundene Groschen	N	301	298
33	Moderne Kunstaussstellung	KuB	338	335
34	Das Altersheim	N	306	302
35	Sachliche Romanze	LiS	101	111
36	Jardin du Luxembourg	HaT	79	91
37	Traurigkeit, die jeder kennt	GzS	255	253
38	Sogenannte Klassefrauen	MaA	184	189
39	Der Streichholzjunge	N	292	288
40	Besagter Lenz ist da	HaT	45	60

番号	詩の題名	掲載	頁	頁
41	Der synthetische Mensch	GzS	233	232
42	Ankündigung einer Chansonette	MgA	187	192
43	Ein Kind, etwas frühreif	HaT	51	66
44	Nur Geduld!	KuB	342	339
45	Spaziergang nach einer Enttäuschung	GzS	275	271
46	Selbstmord im Familienbad	MgA	193	198
47	Wohltätigkeit	MgA	162	168
48	Monolog mit verteilten Rollen	MgA	167	173
49	Plädoyer einer Frau	LiS	149	157
50	Goldne Jugendzeit	MgA	212	216
51	Meyer IX. im Schnee	LiS	128	137
52	Der Blinde an der Mauer	N	299	295
53	Existenz im Wiederholungsfalle	LiS	148	156
54	Frau Großhennig schreibt an ihren Sohn	HaT	48	62
55	Eisenbahnfahrt	N	309	306
56	Kleine Führung durch die Jugend	HaT	53	67
57	Ein gutes Mädchen träumt	MgA	166	172
58	Maskenball im Hochgebirge	MgA	175	181
59	Apropos, Einsamkeit!	HaT	81	93
60	Albumvers	GzS	265	262
61	Beispiel von ewiger Liebe	GzS	252	250
62	Brief aus einem Herzbad	GzS	257	255
63	Junger Mann, 5 Uhr morgens	GzS	263	261
64	Aufforderung zur Bescheidenheit	KuB	341	338
65	Frühling auf Vorschuß	N	302	298

番号	詩の題名	掲載	頁	頁
66	Nasser November	N	304	300
67	Ein Mann gibt Auskunft	MgA	174	179
68	Fauler Zauber	MgA	206	210
69	Ein Buchhalter schreibt seiner Mutter	MgA	203	207
70	Ein Geizhals geht im Regen	MgA	194	199
71	Ballade vom Mißtrauen	GuS	224	224
72	Vornehme Leute, 1200 Meter hoch	LiS	150	158
73	Gewisse Ehepaare	MgA	204	208
74	In der Seitenstraße	MgA	191	196
75	Kurzgefaßter Lebenslauf	MgA	178	184
76	Kleine Stadt am Sonntagmorgen	N	307	304
77	Exemplarische Herbstnacht	GzS	241	240
78	Die Heimkehr des verlorenen Sohnes	GzS	253	251
79	Verzweiflung Nr. 1	MgA	171	176
80	Höhere Töchter im Gespräch	MgA	208	212
81	Ein Baum läßt grüßen	HaT	41	57
82	Wiegenlied, väterlicherseits	HaT	42	58
83	Kalenderspruch	KuB	321	319
84	Genesis der Niedertracht	MgA	211	214
85	Lob des Einschlafens	LiS	142	150
86	Vorstadtstraßen	MgA	185	190
87	Elegie, ohne große Worte	LiS	107	118
88	Eine Mutter zieht Bilanz	LiS	105	115
89	Das Herz im Spiegel	GzS	271	268
90	Gefährliches Lokal	MgA	209	213

番号	詩の題名	掲載	頁	頁
91	Möblierte Melancholie	LiS	152	159
92	Der geregelte Zeitgenosse	GzS	269	265
93	Spruch in der Silvesternacht	N	313	310
94	Das Genie	KuB	339	336
95	Im Auto über Land	N	306	303
96	Gedanken beim Überfahrenwerden	MgA	180	186
97	Prima Wetter	MgA	173	178
98	Direktor Körner ist unaufmerksam	GzS	256	254
99	Junggesellen sind auf Reisen	LiS	102	113
100	Ganz vergebliches Gelächter	LiS	138	147
101	Trottoircafé bei Nacht	HaT	71	84
102	Selbstmörder halten Astenbuketts	LiS	155	162
103	Nächtliches Rezept für Städte	MgA	201	205
104	Eine Frau spricht im Schlaf	MgA	186	191
105	Lessing	N	284	280
106	Mißtrauensvotum	MgA	165	171
107	Herbst auf der ganzen Linie	N	302	299
108	Ein Pessimist, knapp ausgedrückt	LiS	154	162
109	Abschied in der Vorstadt	HaT	59	73
110	Atmosphärische Konflikte	HaT	93	104
111	Der Kümmerer	N	296	293
112	Klassenzusammenkunft	HaT	86	98
113	Stiller Besuch	MgA	189	194
114	Rezitation bei Regenwetter	GzS	242	241
115	Kleine Sonntagspredigt	LiS	139	148

番号	詩の題名	掲載	頁	頁
116	Die Fabel von Schnabels Gabel	N	289	285
117	Modernes Märchen	N	290	286
118	Die Großeltern haben Besuch	GzS	276	272
119	Ein Kubikkilometer genügt	GzS	274	270